

# AR CA DIA

75

SUMMER 2018

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]



  
OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽② 花と鳥のかたち

館長 榊原 悟

蜻蛉とんぼ飛び、虫の声を聞く

前掲したモチーフ一覧を見て欲しい。どんな草花、鳥たちが取上げられているのか―抱一「十二月花鳥図」諸本を相互に比較すると共に、定家詠「十二月月次花鳥和歌」との異同を見て貰いたい。併せて月づきのモチーフではないが、それに準ずるものとして、白鶴本を代表させて「四季花鳥図」の春夏、秋冬のそれも見て欲しい。

まずは抱一「十二月花鳥図」諸本相互について。即座に気付くのは、香雪本のモチーフ選択が他の諸本と全く異なっている点である。同じものが少ない。ここから此本は、弟子たちの代作ではないかと推定されるのだが、確かにモチーフ選択の違いは、そうした推定が成り立つことを示唆する。これに対し他の諸本では、むしろ各月共通するモチーフが少なくない。三月の桜、五月の燕子花かきつばた、八月の芙蓉ふよう、九月の菊、十一月の枯苧こそうなどは、綾瀬本の伝存分も含め、すべての本で登場する。白梅（一月）、菜の花（二月）、牡丹（四月）、紫陽花あじさい（六月）、柿（十月）なども三本以上で描かれている。すべては抱一⇨抱一工房の作だから、当然、起こるべくして起こった傾向なのだろうが、さらにここには選ばれたモチーフこそは、抱一や、抱一に作品を注文した人びとの誰もが、月づきを象徴する草花として納得されるものであったのだろう。その意味で大

江戸人士に最も愛された、いわば江戸の花園を代表する草花・果卉類かきと称してよいだろう。いや、現代のわたしたちから見ても、これらの草花の選択に特段の違和感はない。

気付いて欲しいのは、そうして選ばれた草花に、定家詠や元信「四季花鳥図」のそれと重なり合うものが極めて少ない点である。また逆に定家詠に登場するのに、抱一諸本には一切描かれないモチーフもあつた。そのことを二つの草花に代表させて確認しておきたい。

その花とは、卯の花（定家詠・四月）と菜の花（抱一・二月）とである。既にこれら二つの花については、連載の第二回（眼の極楽⑧）で取上げた。そこで論じたことは、卯の花が郭公ほととぎすと共に夏の到来を告げる景物として、王朝人が待望した花鳥であるのに対し、菜の花は油を採るための商品作物として、江戸中期・十八世紀半ば以降、その栽培が畿内から全国に拡がり、あたり一面を染める鮮やかな黄の花が人びとの眼をひきつけたと云う事実であつた。しかも王朝人が卯の花に対して抱いた熱い思いは、定家詠にも受け継がれたものの、時代と共に、むしろ下がついていったことが否めず、むしろ王朝人が、栽培されてもいない菜の花の美を知る由もない。いや、その菜の花熱でさえ、昨今は大きく退潮、むしろこの花を春の観光の目玉とす

るために、ごく限られた土地での栽培になってしまったのではなかったか。明かりを取るための菜種油なたねあぶらの需要が全く無くなったからである。

つまり卯の花も菜の花も、唱歌に取上げられ広く人口に膾炙かいていしているため、つい時代を通じて愛でられてきた花々と思ひ勝ちなのだが、決してそうではなく、二つの花を見つめる眼自体に、既に或る時代性があつたと云うことだ。卯の花と菜の花は、単純だが重大な、この事実をわたしたちに突きつける。

だがモチーフ一覧は、さらに興味深い事実を教えてください。その夏・秋分を見て欲しい―と云えば、もうお分かりだろう。虫である。本によって取上げる種類も異なるが、各月、次のような虫が描かれていた。

四月	蝶	蜜蜂
六月	蜻蛉	蜚
七月	青蛙	蠅螂 <small>なまこり</small>
八月	馬追	鈴虫

花が咲き、草が茂れば、虫が集うのは当然、自然の摂理だろう。となれば「花鳥図」や「草花図」に虫たちが登場するのは自明であるはずなのだが、定家詠図、元信本「四季花鳥図」で見ると、虫は描かれていない。後者などは、草花がこれだけ賑やかにぎやかに咲き乱れているにもかかわらず、である。意外な

ESSAY

事実だが、迂闊にもわたしたちが気付かなかっただけで、抱「十二ヶ月花鳥図」の虫たちの存在が、逆に「四季花鳥図」における不在を鮮明化させた、と云ってよいだろう。

いや、虫たちの不在は、別に元信本だけに見られる傾向ではない。近世初期(桃山―江戸初期)の狩野派のみならず宗達派も含めた、多くの「花鳥図」「草花図」で観察される傾向であるようだ。従来、ともすれば見過ごされてきたが、花と鳥とのモチーフの歴史を探索上で、なかなか重要な事実ではないだろうか。寂しいことに、それらの「花鳥図」では、鳥の囀りはしても、虫の音は聞こえないのである。

となると、逆に蜻蛉が舞い、虫の声も聞こえる、それこそが抱「十二ヶ月花鳥図」の、そして「江戸の花園」の特長と云ってよいだろうか。そこでは、尚蔵館本と心遠館(ブライスコレクション)本の四、六、七、八月分を代表させて、江戸の花園を覗いて貰うこととした。虫たちがどこに登場するか。もとより彼らの姿を見出すことも、抱「十二ヶ月花鳥図」を鑑る愉しさであるはずだ。

と同時に取上げられた草花の種類が、ここで一気に多彩に、そして一新されていることにも気付いて欲しい。その意味で面白いのは、尚蔵館の四月だ。「牡丹に蝶」である。この組合せが、唐めきたる一対であることは既に述べた(眼の極楽②)。そのイメージの強固な伝統が、ついに抱一の「十二ヶ月花鳥図」まで流れていたのである。では他の草花、

虫たちはどうして描かれたのか。そこで今回は、虫の姿を、先行する作の中に探ってみたい。虫取り網はどこにしまっておいたことやら……。失われた花園へ昆虫採集に出かけよう。

(なお尚蔵館本の八月の虫、一覽では蟋蟀としたが誤りで、馬追に訂正する)

尚蔵館本



四月



六月



七月



八月

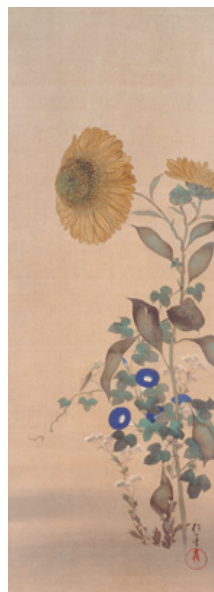
心遠館本



四月



六月



七月



八月

本展では日本屈指の刀剣コレクションを誇る静岡県三島市の「佐野美術館」の収蔵品より、国宝・重要文化財を含む刀剣、刀装具約百件を展示しています。見どころとしてあげられるのは平安時代から江戸時代の代表的な名工の刀剣が一堂に展示されており、本展を通じて約千年にわたる日本刀の歴史を辿ることができます。

日本刀は、刀剣が大陸からもたらされて以来、日本独自の形に進化し、時代ごとに適応した姿が創られてきました。平安時代になると、それまでの直刀に反りが付き始め、平安末期(十二世紀)に優雅な反りのある日本刀が完成します。「太刀銘安綱(展示No.2)は細身で腰反りが強く、鋒が小さいという平安時代の特徴を良く示しています。またこの時代は馬上戦に適した太刀が多く造られました。

鎌倉時代には、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、武士政権を樹立します。日本刀も、元から鋒まで身幅が広く、鋒は猪首鋒となり、武士の時代に合った勇壮な姿となります。「太刀銘景則」(No.5)には動物の毛で鞘の部分覆った「尻鞘」が付属しており、これは狩場などで用いられました。

日本刀の生産で古くから有名な山城(京都)、大和(奈良)、備前(岡山)、相州(鎌倉)、美濃(岐阜)の五つの地域の流派、秘伝を「五カ伝」と呼んでおり、それぞれ素材の特色や製造技法が際立った特色を示しています。山城は清美、大和は素朴、相州は雄渾、備前は華麗、美濃は鋭利といえます。この「五カ伝」の名刀が一堂に展示されているのも、本展の特筆すべき見どころであり、重要美術品「太刀銘来国俊」(山城国、No.9)、「太刀銘包永」(大和国、No.11)、重要文化財「短刀銘国光」(相模国、No.12)、重要文化財「太刀無銘正宗」(相模国、No.13)などが展示されています。なかでも国宝「太刀銘一」(No.16)は、備前刀らしい大きな丁子が連なる華やかな刃文が印象的な絢爛豪華な作で、天正三年(一五七五)長篠の戦いで活躍した奥平信昌(家康の娘婿)に、その功を賞して織田信長が与えたという由緒ある名刀です。南北朝時代には、南朝と北朝の対立を背景に、相手を威嚇するがごとく長

## EXHIBITION

大で身幅が広く、大鋒の太刀が生まれました。重要文化財「太刀金象嵌銘備前国兼光/本阿弥(花押)」(No.31)は備前長船派四代を継いだ名工兼光の作で、後世に擦りあげられています。元は刃長が1mを越えていたとみられる大太刀です。

室町、戦国時代には戦闘方法が馬上から鉄砲が最前線に立つ集団戦へと大きく変わり、太刀より短い打刀が多用されるようになりました。この時代に美濃は備前に次ぐ一大産地となり、関を中心に多くの刀工が活躍しました。なかでも兼定と兼元が有名ですが、「刀銘和泉守藤原兼定」(No.43)は通称「之定」と呼ばれる二代兼定の作で、美濃刀の特徴である尖り互の目の刃文が見事です。その後、戦のない平和な江戸時代には、刀剣は戦うためではなく、剣術(居合道)に適した反りの浅い姿になりました。千年にわたる日本刀の歴史を辿りながら、日本人が培ってきた美意識や文化を感じて頂ければ幸いです。



国宝「太刀 銘 一」鎌倉時代(矢部コレクション)(佐野美術館寄託)

## 特別企画展 名刀は語る —美しき鑑賞の歴史—

浦野加穂子

会期：平成30年6月2日(土)～7月16日(月・祝)

## 企画展

# ジョルジュ・ブラック —宝飾デザインの輝き

## 高見翔子



ジョルジュ・ブラック《三つの恩恵(三美神)》1961-63年  
サン＝ディエ＝デ＝ヴォージュ市立ジョルジュ・ブラック・メタモルフォーシス美術館 Archives Armand Israël

ジョルジュ・ブラック(一八八二―一九六三)は、パブロ・ピカソらとともに二〇世紀初頭に興った芸術運動「キュビズム」の成立と展開に関わりました。彼はキュビズムという動向において、複数の視点によって切り取られた断片を以て対象物の立体的な全容を平面上に表現するために、分割と再構成という手法を採りました。その後も独自の表現を追究し、さらに深化させていったブラックが晩年に重視した考え方は、「メタモルフォーシス(変容)」でした。

ブラック自身の思考としての「メタモルフォーシス」とは、表現された作品そのものを意味内容として捉えるのではなく、作品を通して、あるいはそこに何か意味が生じるといった、変容の過程にありました。またブラックが一九六一年から六三年に制作した、一連の平面と立体作品の総称を「メタモルフォーシス」と呼びます。

本展では、ブラックが晩年に取り組んだ作品群「メタモルフォーシス」のうち、彼がデザインを手がけた工芸品を中心に紹介します。ブラックによるデザイン画をはじめ、陶磁器やジュエリー、彫刻、ステンド・グラス、タピスリーなど、これまで日本で注目される

## EXHIBITION

機会があまりなかった約九十点におよぶ作品を展覧します。また作品の多くは、フランスのサン＝ディエ＝ヴォージュ市立ジョルジュ・ブラック・メタモルフォーシス美術館より出品されます。

展覧会のみどころは、作品群「メタモルフォーシス」の制作活動について、そのはじまりから立体作品への変遷の過程をご覧いただけるところにあります。作品群「メタモルフォーシス」では、古代ローマの詩人オウィディウスによる『変身物語』に登場する神々の変身をテーマにし、多様な方法で制作されています。

第一章では、制作の根幹である平面作品を紹介します。出品作品のグワッシュ画は、その後に様々な立体作品が作り出される下絵となっています。ブラックは、自身によるデザインのジュエリー制作協力を、ジュエリークリエーターのエゲル・ド・ルヴェンフェルド(一九二〇―)に依頼します。ド・ルヴェンフェルドは、ブラックと協働して数々のジュエリーや彫刻などを制作し、作品群「メタモルフォーシス」の最も重要な部分を具現化していきました。

本展の核となる第三章では、陶磁器や彫刻、室内装飾と、多岐にわたる表

現方法に挑戦したブラックの取り組みを紹介する中で、とりわけ「メタモルフォーシス」シリーズにおける最も重要な作品群として、ジュエリーを紹介いたします。一九六一年、ブラックはド・ルヴェンフェルドにジュエリーの創作協力を依頼し、このプロジェクトを展開させていきます。フランス文化大臣のアンドレ・マローは、ブラックの絵画が貴石と貴金属を纏う立体に変容したさまを目にし、これらを「ブラック芸術の最高峰」と讃えました。またマローの協力もあり、一九六三年には、パリ装飾美術館において「ブラック・ジュエリー展」が開催されました。

このような彼の創作に対する姿勢と協働による展開は、視覚による幸福をさらに触覚の幸福によって補いたいという画家の要望の実現へと向かっていきました。晩年期のブラックによる造形への探究から創出された、独創的でありながら工芸の世界をぜひお愉しみてください。

会期：平成30年7月28日(土)～9月17日(月・祝)

## 企画展「クエイ兄弟―ファンタム・ミュージアム」イベント後記

## 『大儀義雄文庫目録』刊行によせて

柴田富彦

今回の展示関連イベントは、映像作家であるクエイ兄弟の繊細な作品やアニメーションのセットの鑑賞と併せた上映会が好評で、追加上映会も開催しました。また、五月十八日の国際博物館の日と、ナイトミュージアム参加者には、限定でクエイ兄弟「直筆サイン入り」のポストカードをお渡しし、作家をより身近に感じていただきました。

□五月六日(日)：スペシャル・トーク「クエイ兄弟の夢の世界」

登壇者：

滝本誠氏(映画評論家)

「クエイ兄弟の手作り魔術」

赤塚若樹氏(首都大学東京教授)

「ふたりの好きなもの」

□上映会

○四月十五日(日)：『人工の夜景―欲望果てしなき者ども』一九七九年、

『ヤン・シヴァンクマイエルの部屋』一九八四年、『ファンタム・ミュージアム

―ヘンリー・ウェルカム卿の医学コ

レクション保管庫への気儘な侵入』二

〇〇三年

○四月二十二日(日)：『イーゴリーパ

リでプレイエルが仕事場を提供していた

頃(1920―1929)』一九八二年、『スト

リット・オブ・クロコダイル』一九八六

年、『ワンダーウッド』二〇一〇年

○五月三日(木・祝)：『ギルガメツ

シュ叙事詩を大幅に偽装して縮小し

た、ハナー・ルウス局長のちよつとし

た歌、またはこの名付け難い小さな

ほうき』一九八五年、『変身』二〇二

年、『スティル・ナハト2―私たちは

まだ結婚しているのか?』一九九二年

○五月十三日(日)「追加」：『スト

リート・オブ・クロコダイル』一九八六

年、『ベンヤメンタ学院、または人々

が人生と呼ぶこの夢』一九九五年

□ギャラリートーク：四月二十八

(土)、五月十二日(土)・「追加」五月

十八日(金)

□ナイトミュージアム(年間パスポー

ト会員限定)：四月十四日(土)



スペシャル・トークの様子(5月6日(日)開催)

## EXHIBITION

本目録は、俳諧の研究者で愛知教育大学名誉教授・故大儀義雄氏が研究のために蒐集された俳書等の典籍などを、国文学の専門家の方々のご協力を得て目録化したものです。

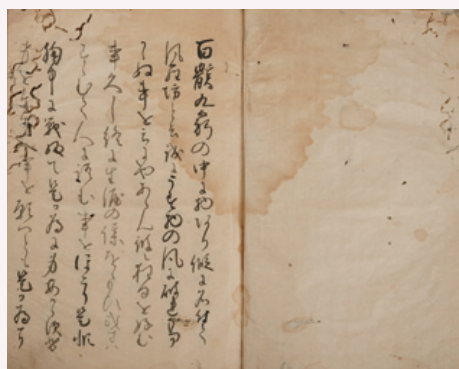
同氏が蒐集された典籍群は平成二十六年に当館へ寄附されました。目録の収録点数は二六七八点。主に江戸時代の俳書をはじめ、近世の文芸など多岐にわたって収められています。

俳書では松尾芭蕉の『奥の細道』や小林一茶の『おらが春』といった有名な典籍をはじめ、芭蕉の紀行文として親しまれている『笈の小文』とは大幅な異同のある『笈の小文』(異本)や、『蕪村句集』の初版本など数多くの貴重な典籍が収められています。

それら以外にも柳亭種彦の『修紫田舎源氏』や同氏にもご尽力頂いた『新編岡崎市史十三 近世学芸』に収録されている『鶴芝』、『苗代集』。また岡崎市ゆかりの俳人鶴田卓池の『燕岡集』や『すぎぞめ集』の典籍や掛軸など、地元岡崎市に関するものも収められています。

す。ここでは一部しか紹介しておりませんが、その他にも貴重な典籍がたくさんあります。

「俳書とはどんな本だろう」、「有名な『奥の細道』はどんな感じの本なんだろう」などと少しでも興味を持ちましたら、是非目録を手にとつて江戸時代の典籍の魅力を味わつて下さい。郷土の俳諧研究の第一人者の同氏が生涯にわたつて蒐集した貴重な典籍を、ひとりでも多くの方々にこの目録を見て活用して頂くことが、編集に携わった一人としての願いです。



「笈の小文」(異本)

## 新体制のスタッフ紹介

### 堀江前副館長が 愛博協功労賞を受賞

本年六月十四日(木)に開催された平成三〇年度愛知県博物館協会総会において、当館の堀江登志実前副館長が愛知県博物館協会功労賞を受賞しました。学芸員としての永年の勤続と、他の模範となる功績についての受賞です。授賞式では、社会構造が変化する中、学習意欲ある人々へ向け今後の博物館が果たすべき役割が増すと挨拶し、現在も当館の学芸の牽引者として、引き続き活躍中です。



### 副館長 鈴木智子

この春、美術博物館副館長を拝命しました。実はかれこれ二〇年以上前のハナシですが、オープン当初の美術で学芸員として勤務していたことがあります。でも、その後はずっと市役所勤務の「ツウの公務員」として過ごしてきたので、まさかここに再び戻ってくるとは思っていませんでした。

先日、東京へ行ってきました。次に巡回する予定の「ブラック展」を、パナソニック汐留ミュージアムで見たあとは、ひたすら展覧会巡り。二日で六会場をハシゴしました。どれも見応えのある展示で、一気に見てしまうのは勿体ないものばかり。なかでも印象に残ったのは、ルドンの《グラン・ブーケ》、伝宗達(蔦細道図屏風)、「体内美術館」と称した美しすぎるラットの体内映像。そう、何だかんだ言って、好きな世界ではあります。



## COLUMN & TOPIC

### 副館長代行 諸井力

この春より当館の副館長代行になりました諸井です。

文化芸術の部署は初めてですが、過去にまちづくりの部署で、将来の夢(計画)を語る仕事をしていました。今回、当館にきて今度は夢を与える仕事ということで、直接、展覧会の企画に携わることはないのですが、広報やイベントの企画では、毎日のように、部下の職員に夢を語って、ハッパをかけています。

また、イベント等では、直接携わることもあり、まちづくりで経験したことや、当館で、今までやってこなかったことを企画して、大いに盛り上げていこうと考えています。

これからも、当館が多くの市民に愛され、親しまれる場所を目指して、頑張っていきますので、よろしくお願いたします。



### 学芸員 小幡早苗

今年の春より、当館の学芸員として参りました。開館翌年に岡崎市へ入庁して以来、市教育委員会でも文化財の担当を二十年ほどしており、この度が初めての異動です。

前職では、大学で考古学を専攻していたことから埋蔵文化財の担当者として、近世初期の石垣が確認された岡崎城跡や馬、人、朝顔型など様々な形象埴輪が出土したイオンショッピングセンター内の外山古墳群の発掘調査などに携わってきました。

地中から掘り出された出土品を実際に見ていただくことで、モノそのものが持つ時間や空間を超えて歴史を語る力を実感していただける展示を当館で行っていただけらと思っております。そして、岡崎の歴史がいつでも皆様に見ていただけるよう、一歩一歩も力を尽くしていく所存です。



# INFORMATION

## ■平成30年度企画展

### ジョルジュ・ブラック—宝飾デザインの輝き

7月28日(土)～9月17日(月・祝)

□講演会(当館1階セミナールームにて)

日時:7月29日(日) 午後2時～

「芸術における規則と感情

—ジョルジュ・ブラックにおけるキュビズムから古典主義への変容」

講師:松井裕美氏(名古屋大学高等研究院人文学研究科特任助教)

□ギャラリートーク(当館1階展示室にて)

日時:8月18日(土)、9月2日(日)各日とも午後2時～

□ワークショップ(当館地階作業スペースにて)

「真絵のプローチづくりチャレンジ」

日時:●子ども向け:8月16日(木) 小学4年生以上対象

※同伴者1名可。小さなお子さま連れはご遠慮ください。

●一般向け:9月8日(土)

各日とも午前10時30分～12時、午後2時～3時30分

講師:金沢みのり氏(オフィスマッチングモウル)

定員:各日とも午前・午後10名ずつ ※事前申込制。応募多数の場合は抽選。

参加費:各回ともひとり500円(プローチ1個制作。当日おつりのないようご注意ください。)

#### 申込方法

ハガキに①～③を記入し、当館までお申込ください。(7月31日(火)必着)

①参加者の氏名(ふりがな)と希望日時・小学生は学年も記入 ※1枚2名まで

②参加者全員の郵便番号・住所・電話番号

③【子ども向け】の場合は同伴者の有無

#### 申込先

〒444-0002 岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

岡崎市美術博物館「プローチづくり」係

## 刀の展示

「名刀は語る展」の入館者には若い女性が多く、広く刀剣への理解が進んでいるようで、たいへんうれしく思います。博物館での刀剣展示もやりがいがあるように感じます。私自身、展示をするために刀について勉強しようと思ったのが三〇年ほど前になるかと思えます。刀剣のことがわかるとい日本美術刀剣保存協会の会員となるとともに様々な書籍に目を通しました。そのなかで感じたのが、刀剣は自ら手にとらないと十分には理解できないのではないかとということ。博物館のケース展示によるガラス越しでは限界があり、刀剣の重量、重ねや反りについてはやはり手にとらないと実感できないかと考えます。しかし、これでは博物館展示での刀剣鑑賞が成立しません。ガラスケース内展示という限界はあるものの、照明など様々な工夫により、手にとったときの実感を視角的に体験できるように展示の手法についても工夫をしていくことが必要でしょう。照明もその一つです。また、刀特有の鑑賞用語である鍛え肌についての板目や柃目、沸(にえ)や匂(におい)、映りと呼ばれる刀の持つ属性についても実感できるように工夫が必要です。愛刀家の一人として多くの人に理解を広げていきたいと思えます。(堀)

## おしゃべり、あれこれ。

### 幸せの風景

たぶん誰にでも、思い出の場所、幸せの風景というものがあると思う。五月下旬ふと思いつき、久しぶりに自分にとってのそうした場所に寄ってみた。

そこは決して良い思い出ばかりではない。思い出したくないことも無いわけではない。だけど足を踏み入れた瞬間、胸の淀みがすつと消えていく感じがした。あの頃とは確かに少し違うけれど、本質的には変わっていない風景に安堵した。なんだ、これならもつと早く来ても良かったな—

それから少し、その場に行んで、物思いに耽った。少し薄れ、角の取れた過去。今だから気付けた良さ。当時そこで思い描いていた別の未来。思考の中で自在に時間を行き来する度に、心は温かくなり、たまに苦しくもなった—

岡崎に来て五年。怒涛のように押し寄せる日々立ち向かうことに一杯で、過去を省みるということを全くやって来なかった。今回思い出の場所から現在地を見ることで、その途中で忘れていた大切なものを拾い直せたような気がした。そっか、今来るべくして来たんだな—

迷ってきたらまた来るよ、と頭の中で独りごちながら、その苦しくなるほどに幸せな風景を後にした。(湯)

編集後記 | 今号から編集を担当いたしますのでよろしくお願い致します。大磯義雄文庫には、鶴田卓池の『燕岡集』がありますが、岡崎市美術博物館にも毎年、燕が集い、只今は巣立ちをした一番子たちが空を去来し、二番子の卵が新しい巣の中であたためられています。展示品と豊かな自然に会える当館へ、何度もお越しいただけるよう、美術博物館の魅力をお伝えできればと思っております。(小幡)

表紙図版:ジョルジュ・ブラック《トリブトレモス》1961-63年 サン=ディエ=デ=ヴォージュ市立ジョルジュ・ブラック-メタモルフォシス美術館蔵 Archives Armand Israël



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第75号 2018年7月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)